

## 府立松原高等学校「学校運営協議会」報告書(第3回)

日 時	令和5年2月4日(土) 14:00-16:00			
出席者	運営協議会委員	職名等	学校事務局	校務分掌等
	房本 晃	(福)バオバブ福祉会理事	島津 邦廣	校長
	菊地 栄治	早稲田大学教授	麦田 伸一	教頭
	森岡 次郎	大阪公立大学准教授	中川 泰輔	首席・1学年代表
	野崎 龍介	松原市立松原第三中学校長	伊藤 あゆ	首席・3学年代表
			山口 裕子	人権教育主担
			眞杉 凌	人権教育主担
	教職員等	小林 美由里(1学年) 山本 杏寿(1学年) 亀田 恵美(2学年代表) 市橋 菜津美(2学年) 太口 雅之(2学年) 荻野 敦紀(3学年) 後和 伸之介(3学年) 田中 大樹(3学年) 平野 智之(追手門学院大学教授)		
主なテーマ	今年度の振り返りと次年度の方針と計画			
協議内容 の概略	<p>1. 学校長より 学校教育自己診断アンケート結果、学校教育計画、スクールミッション</p> <p>2. 今年度の取り組み</p> <p>①産業社会と人間(中川首席) 松高の根幹であり、最も大変な科目。調べ学習→発表までがよくある産社。それを隣の仲間(他者)とともに学ぶまで繋げることが大切。「~のために~を学ぶ」を大切にしてほしい。人間関係の難しさが大変さにつながった。HR 合宿を通した「安心のベース」形成の速度に課題。</p> <p>②課題研究(眞杉教諭) なぜそのテーマをするのか、そのテーマをする意味・動機をしっかりと考え、文献や FW を通して学び、出会い、考え直したものを、どう生きていきたいのかをとおして発表する。 自分の話から始まり、こんな私だからどうしたいを伝えている。</p> <p>3. リレートーク「松原高校が果たす役割」 (後和教諭) 家庭科は、この先どう生きていくのか基盤をつくる科目。家庭科を通して生きる力を育てたい。とくに、とくに食生活が心配。食堂の充実もはかってほしい。18歳成人を送り出すうえで、社会性を身に着けさせてあげたい。 (小林教諭) 産社を学ぶ意味を考えた1年。産業社会と人間=生活と私。他者の生活に踏み込んで学ぶ、自分を打ち明ける、学びに必ず他者がいる。生徒が自分を語りだし、受け止め、学びあっている。 (荻野教諭) 勉強に苦手意識のある生徒が多く、できる、おもしろい感覚が大切。一方で、できないこと、知らないことの認識も大切。これは自己否定でもあるため、苦しい。しかし、できないことを認めないとできる段階にはこない。できへん自分を出せ、まちがっても笑わないと伝えている。 (山本教諭) やりがいとは、生徒たちの成長を見つけたとき。あいさつが返ってくるようになった、「いややけどや</p>			

	<p>ってみたら楽しかった」と言ってくれた。先生っていう立場だけで話を聞いてくれたりきっかけを与えることがある。不思議で重さも感じた、自分の成長も必要だと感じた。</p> <p>(田中教諭)</p> <p>支援生と生徒、先生のかかわり。サポートが囲い込みになっている現場もあるが、うちはそうではない。同じ土台で、同じ目線で接している。世間に出たときに今までの3年間が出る。まったく異なる環境で自分とは違う人とどうかかわるか。教員も含めて学び続ける必要がある</p> <p>4. 協議委員からのご意見、提言</p>
<p>提言内容・改善方策</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもたちがうごいている間の、支援者や教員の動きはどうなっているか。教師がどう関わっているかを見せて、生徒たちがそれを発展させるもの。かっこいい報告がいわげじゃない、正解を求めなくていい。</li> <li>・評価やめてもいいと思う。数が高いからよいというわけではない。外側からのものさしにフィットすることは大切ではない。こう入力したらこう出力されるとかではない、いつ響くかわからないものである。学校とか教育ってそういうもの。だからこそ、こうあってほしい、これは許せない、などはどんどん言葉にしてい。</li> <li>・当事者が自分の言葉で語っていてすごい、を前提に話をすることが開示にこそ意味があるという風になるより外に開いていく視点がもっとあってもいい。</li> <li>・課題研究をきっかけに自分自身の経験に向き合うことができた。あとから背景を知ったり、言ってきたりする子もいる。当時は閉ざしていたりすることも多い。</li> <li>・こちらから良かれと思ったアプローチが自由を奪うこともある。支援ってそうなってはいけない、関わる側の思い先行はちがう。その子が何を考えて何をしたいかを中心にしているか。</li> <li>・関係性の中で、自分の課題をどう学ぶか。聞ける人がいたから言えた、関係、安心感、信頼感があるからこそ。関係作りがこの授業を支えている。評価軸がやや高い。形成的評価でいい。よくここまで関係性の豊かさを作れた、次につなげていけると思う。</li> <li>・学校っておせっかい、不自然な場所である。例えば、発問。質問とは、わからない人がすること。「こうあってほしい」のものさしに当てはめている傲慢さ。松高は形式的にすませようとしていない分、見えてくるものがたくさんある。語れる場があるだけですすごいこと。自分で決まる、相談する、助けを求める幅を広げていくという軸さえしっかりしていれば良い。生徒は深いところ、出したいところを出せているのか考えるけどこうして出せていることはすごいこと、できることを大切にしたらいい。松高なりの深掘の仕方で十分。求めすぎなくていい。</li> <li>・松高に生徒を送るときに、松高ならどうにかしてくれると思っている。しんどい子たちが力をつけている学校。送ったあと、課題研究などを見たときに力をつけてもらった、成長したな、よかったなと思ってきた。そう思ってもらえる学校であるということを覚えておいてほしい。自分の学校という気持ちを持ってほしい。「この学校」と言っているうちは他人事。ぜひ、「うちの学校」と言ってほしい。</li> </ul>